

第2回豚研究会

－補足説明資料－

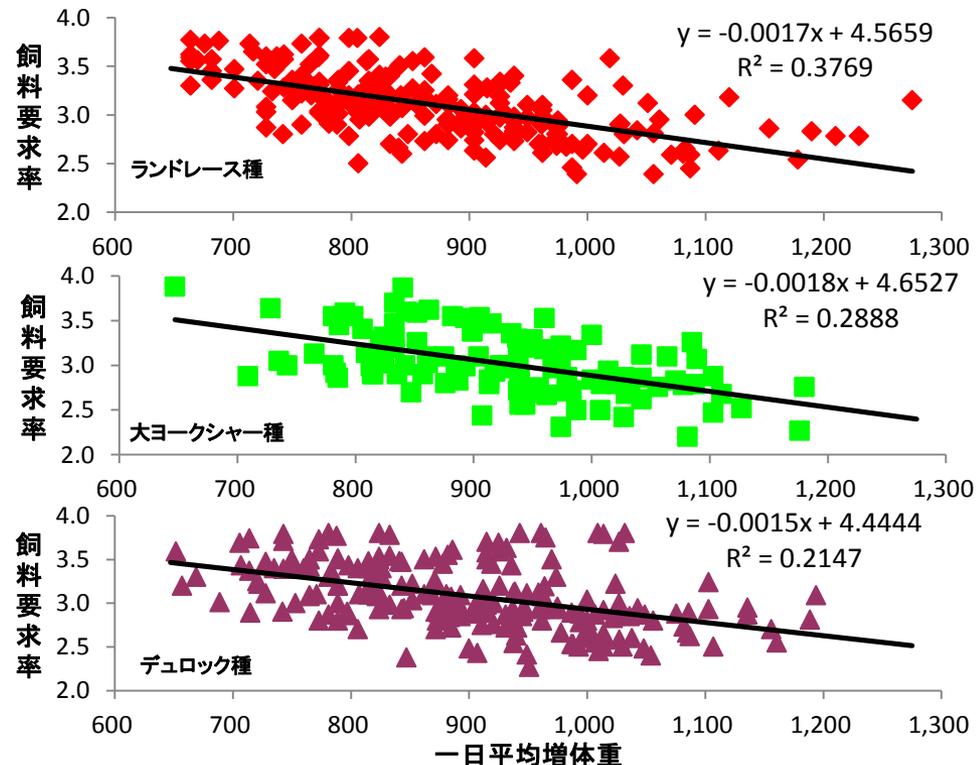
1. 産肉能力について（一日平均増体量と飼料要求率の表型相関）
2. 産肉能力について（筋肉内脂肪含量）
3. 今後の豚改良の考え方

産肉能力について(一日平均増体量と飼料要求率の表型相関)

- 衛生上の観点から、直接検定の頭数が減少しており、飼料要求率のデータが取れなくなっている状況
- 一方で、1日平均増体重と飼料要求率には一定の相関が認められ、1日平均増体重の改善が飼料要求率の改善にもつながるものと思料
- このため、今回の家畜改良増殖目標設定にあたっては、1日平均増体重と飼料要求率との相関を踏まえ現在値を推計。ただし、将来的に関連データを増やしていく方策についても検討。

○品種別の飼料要求率と1日平均増体重との表型相関

	雄雌平均		雄		雌	
	相関係数	例数	相関係数	例数	相関係数	例数
全体	-0.539	(539)	-0.506	(459)	-0.455	(80)
ランドレース種	-0.614	(218)	-0.556	(150)	-0.466	(68)
大ヨークシャー種	-0.537	(113)	-0.536	(105)	-0.552	(8)
デュロック種	-0.463	(208)	-0.46	(204)	-0.805	(4)



産肉能力について(筋肉内脂肪含量)

- 国産豚肉の筋肉内脂肪含量(ロース芯)は2~3%程度
- 一般的な肉豚(LWD)において、ある程度のロース芯筋肉内脂肪含量が入ることで、輸入豚肉との味における差別化が可能。
- そのため、家畜改良増殖目標において、止め雄として利用されているデュロック種の系統造成の方向性の一つとしてロース芯筋肉内脂肪含量の目標値を新たに追加する方向で検討

【現状】筋肉内脂肪含量

○肉豚(LWD)

- ・ 2.4%(千葉県調べ)
- ・ 3.2%(岐阜県調べ)
- ・ 2.3%(鳥取県調べ)

○系統豚・銘柄豚(デュロック)

- ・ しもふりレッド 5.0%
- ・ ユメサクラ 4.5%
- ・ フジロック 5.65%
- ・ ボーノブラウン 6.0%

○脂肪含量が異なるデュロック種豚肉3種類

(3.6%、6.0%、8.0%)官能評価結果 ((独)家畜改良センター)

	2試料間の有意差		
	3.6<6.0% 好ましい	3.6<8.0% 好ましい	6.0<8.0% 好ましい
やわらかさ	**	**	ns
多汁性	**	*	*
風味	**	**	ns
あっさり感	ns	**	ns
おいしさ	**	*	ns

注)2試料間の有意差検定: **:p<0.01、*:p<0.05、ns:p>0.1

【筋肉内脂肪含量の目標の考え方】

・肉豚(LWD)で4%程度を目指す考えの下、デュロック種において、差別化やブランド化に資するものとして概ね6%を目途に系統の作出・利用を図る

今後の豚改良の考え方

〈現状〉

- これまで国は雄系、都道府県は雌系を主体に、限られた遺伝資源の有効活用、効率的な種豚の能力・斉一性の向上を図るため、それぞれ独自の系統造成を実施してきたところ
- しかしながら、これら機関同士の効率的・効果的な連携による改良が図られているとは言い難く、また、近年、系統造成を実施・継続意向の県も減少
- こうしたことも背景に、繁殖能力についての改良は、海外の豚肉輸出国と比べ遅れをとっている状況



〈今後の方向性〉

【繁殖形質】

- ・ 繁殖形質については、1腹当たりの育成頭数の向上が必要であり、当面の目標としては、海外の先進的な成績を参考にして、開放型育種も視野に入れながら、効果的な改良を実施していく必要

【産肉形質】

- ・ 雄系については、肉質面で一定の評価・ニーズが認められることから、引き続き国内のニーズに即した改良を推進(特に、デュロック種について、差別化やブランド化に資するものとして、ロース芯筋内脂肪に着目した食味の面での優位性を追求)

【改良体制】

- ・ 国や都道府県で、それぞれ単独で改良を進めることが困難となってきたため、家畜改良センターと都道府県、民間との一層の協力体制を構築していく必要
- ・ 特に繁殖能力については、育種母集団の拡大と選抜圧を高めていく必要があり、今後、広域的な優良改良素材の活用と遺伝的能力評価の実施に向けた体制強化が重要

(協力体制のイメージ)

家畜改良センターを中心に、協力可能な都道府県及び民間の間で血縁構築(グループ化)を図り、広域的な遺伝的能力評価により繁殖能力に優れた種豚を選抜